



AIYES 通信

横浜スペイン交流協会会報

2004年5月1日発行 第38号 発行・横浜スペイン交流協会事務局

2004年度定時総会・懇親会開催のお知らせ

2004年度の定時総会を下記の要領で開催します。

この総会では2003年度の会計報告並びに2004年度の事業計画のほか、当協会の規約の一部改定、並びに新役員の選出などが諮られます。また、2005年は、当協会設立15周年に当り、その記念行事もいろいろと準備をする時期になっています。多くの会員の方のご意見を伺いながら15周年を楽しく、意義のあるものとして迎えたく計画を進めていきたいと思ひます。是非、多くの方のご参加をお待ちしております。

総会の後、懇親会を同じ場所で引き続き開催します。

既にお馴染みのトゥナのホルヘ(Jorge)さんをお招きし、午後のひとときを楽しく過ごしたいと思ひます。

－記－

1. 日時： 2004年5月16日(日) 受付13:30 総会14:00
2. 場所： 横浜駅西口「CIAL」7階「ニュー・ホッペン」
3. 総会後の懇親会参加費： 1,000円

***** スペイン・サロンへのお誘い *****

本年度7月のスペイン・サロンのご案内を致します。お知り合いや友人をお誘い合わせ、多くの皆様のご参加をお待ちします。協会々員以外のご出席も心より歓迎いたします。

●2004年7月度例会

日 時：7月17日(土) 14:30～16:30

場 所：県民サポートセンター7階/711号

講 師：雪山行二さん(横浜美術館館長)

テーマ：「神は細部に宿るースペイン絵画にみる静物表現」



当協会会員でもある雪山さんは東京大学大学院卒業後、国立西洋美術館学芸課長、愛知県美術館副館長を経て2002年4月より現職。当日は上記テーマが示すように、スペイン絵画を独自の視点からその見方と時代背景に触れながらお話をして頂きます。

参加費：会員 無料 非会員 500円(茶菓代を含む)

担当/澤田真人
山崎宗城

千葉博子

スペイン好きな人達のつどいスペイン・サロン

●1月のスペイン・サロン 「スペイン・サロン新年の集い」

＜Sr. Jorge Díaz（トゥナのホルヘさん）と遊ぼう＞

1月のスペイン・サロンは、新年最初の会合であり、毎年楽しい企画で開催されています。今回も42名の会員の方々が参加されました。下山会長の年頭の挨拶、西丸理事のウイットに富んだお話と乾杯の音頭で始まり、会員有志提供のワインも加えての昼食の後、NHK教育テレビ・スペイン語講座にも出演されているトゥナのJorge Díazさんの歌を楽しみました。スペインの伝統的なトゥナのコスチューム、ギターの調べとJorgeさんの浪々たる歌声に、会場の雰囲気も一気に盛り上がりました。その場にぴったりの曲目である、“A mí me gusta el vino”、“Fonseca”、“Clavelitos”を参加者全員で合唱し、予定の時間もあっという間に過ぎてしまいました。



▲Jorgeさんと合唱するみなさん

トゥナは13世紀に、スペイン中西部の都市サラマンカで、学生達の中から生まれた伝統的な音楽スタイルとのことです。Jorgeさん達の音楽グループによる“La Tuna de Japón”は日本で録音されたトゥナの最初のCDとのことで、早速私も買い求めJorgeさんにサインをしていただきました。（山崎 宗城）

●2月のスペイン・サロン 「スペインのロマネスク」 清水準一氏



▲スライドを使いながらの清水講師

2月度は「スペインのロマネスク」と題した、講師清水準一氏の旅物語をお聞きしました。

2001年9月7日から13日間の同じと思われるコースを旅した私にとりましては、卒論準備学生よろしく「わたしの旅のまとめ」になりました。

スライドによる説明と写真を見ながら感じたことは、“知識を持って旅する人と、何の予備知識もなく物見遊山”の私のそれとは、自ずとその差は歴然。同じ物を見たのに！こうも違うのか？ と驚くばかりでした。

講師の写真と私の物とは、被写体が同じでもプロ、アマ、の差は当然としても「違って当たり前」と言うショックはどうしようもありませんでした。集まった人々は用意された椅子が足りず、委員さん方は立ち見席となり、関心の大きさがうかがえました。

「北スペインのロマネスク」または「ロマネスク」と言う響きに魅了された人ばかりの集会のようでした。後半は講師のご好意による格安の自著をテキストに、お話が進められました。「百聞は一見に如かず」のことわざ通り、一般公開されていない部分にも、カメラを向けられた苦勞ばなしや、一瞬のチャンスをもににする工夫など、貴重な体験をご披露下さいました。更に敬服させられたことは、シャッター・チャンスを求めて一度ならず再三訪問し、自然条件などにも変化を求められており、文化遺産への畏敬にも似た愛着を感じさせられました。

「ロマネスクとは？」の問いにも参考図書や文献の紹介があり、懇切丁寧な内容でした。アカデミックな

内容のテーマではありましたが、素人の私にも充分理解出来た講演でした。そして、過去に見学した古い教会の外観に似合わず、最新のホテルを思わせるような聖堂に、「何故？」を持ち続けていたことの回答も得られました。即ち、教会は現在の最新芸術作品なのです。

久しぶりのサロンに参加しました。今後このシリーズの続編を期待し更に関連する内容を待ちます。講師、並びに企画なさいました委員のご努力に感謝いたします。
(西川 貞子)

●3月のスペイン・サロン 「桜について」 池本三郎さん

横浜自然観察の森・園長・樹木医（銘木・古木から街路樹、庭木など全ての樹木を対象に、樹木の診断や樹勢回復、病気の予防、後継樹の保護育成に携わる専門家）でもあり協会理事の池本三郎さんをお迎えし“桜について”スライドを交えてお話していただきました。

冒頭、飯塚さんより、横浜スペイン交流協会と桜についての歴史的背景やロンダやセビリアの植樹した桜の現状の紹介がありました。

池本さんは1998年2月、横浜スペイン交流協会の「さくら植樹」スペイン友好親善の旅に桜育成指導として同行（前回も参加）、お話によるとセビリア市パルケ・デ・ロス・プリンシペス公園課長アントニオ氏は植樹場所として適したところを選んでくれ、植樹直後も鉄製の柵囲いを設置するなど、こうした心配りが、植樹した桜の成長具合からも読み取れたそうです。

スペインは酸性土壌で桜が育たないので、池本さんは試行錯誤の結果サクランボの苗木に接木してこれしかないとお考えになったそうです。当日はわざわざご自宅から根付きの桜をお持ちになって接木・さし木のやり方を実演して下さいました。接木のやり方もスペイン流と池本流日本式の違いがあることが解りました。樹木の芽接ぎのあと台木の芽欠きの煩雑な手間を惜しまずに大事に育てるお話の中から優しさが伝わりました。



▲池本さんの実演に見入る参加者

ポトマック河畔の桜や横浜市内の穴場の美しい桜など紹介され心和むサロンでした。皆さん、横浜自然観察の森へ出掛けてみてはいかがでしょうか、園内で池本さんにお会い出来るかもしれませんよ。

最後に新しいサロン委員の紹介がありました。

牧瀬さん、大竹さん、宮川さん、鎌田さん3年間、毎回実に多彩で充実した企画、皆さまのご努力に心から感謝の拍手∞拍手∞拍手∞拍手、本当に有難うございました。
(山下 幸子)

旧スペイン・サロン担当からのご挨拶を申し上げます。

私共4人は手探りの状態から始め皆様の暖かいご支援、ご協力によりまして何とか努めることが出来ました。あっという間の楽しい3年間でした。

これからも新しい担当の方々と協力し“私達のスペイン・サロン”を盛り上げていきたいと思いますので、どうぞ私共同様によりしくお願い申し上げます。

大竹智栄子、鎌田 暁子、宮川美句子、牧瀬 貢

***** 文化講座からのお知らせ *****

♪ ♪ 「スペイン音楽サロン」 へのお誘い ♪ ♪

AIYES通信37号で年間計画をご案内済みですが、6月と9月の予定をお知らせします。

◆第13回（6月8日）13:30～15:30 県民サポートセンター

ラテン・アメリカの歌曲を聞く

（ボンセ、ヒナステラ、グアスタビーノ、ヴィラ・ロボス）

柳さんのスペインと歴史上密接な関係にあるラテン・アメリカの歌曲のCDを使って名曲を聞いてみたいと思います。

◆第14回（9月14日）13:30～15:30 県民サポートセンター

サルスエラ「早咲きの女」（一幕）ヒメーネス（1854-1923）

舞台がグラナダのこの「サルスエラ」は、アンダルシア出身の作曲家ヒメーネスの素晴らしい名曲です。浜田滋郎さんが「早咲きの女」と名訳しています。

◆本年度はリブレートのコピー代等のため会費として会員、非会員共に1,000円を徴収させていただきます。

◆申込み／問い合わせ先：安田秀之



▲珍しい「早咲きの女」の楽譜表紙

たのしい 「絵画教室」

絵画教室は、真鶴半島の海に近い島津画伯のアトリエで、時には近くの海岸に出かけたりしながら、楽しく開催されています。

島津画伯はスペインの詩情を描く画家として、個展ではいつもスペイン大使館の後援を得ている画家です。

スペインへ旅してちょっとスケッチをと思い立ったあなた、ぜひ島津画伯の親切的な指導を受けてみませんか。

◆6月以降の開催予定日（原則として毎月第1土曜日開催）

6月5日（土）、7月3日（土）、9月4日（土）

※8月は夏休みです



▲ビレネー山麓の教会（高柳 治子画）

絵を初めて描いてみようと思われる方や、すでに描かれていて、さらにブラッシュアップを考えておられる方々の見学を受け付けています。水彩・油彩・アクリルなど、ご自身のやってみたい手法で自由に習うことができます。

◆絵画教室参加費：1回（1ヶ月）、会員 2,000円、非会員 2,500円

▶▶▶ スペイン語教室だより ◀◀◀

I. スペイン語会話・ABC入門 “ロサ” 新設

本年4月より新たにスペイン語会話・ABC入門 “ロサ (Rosa)” を開設しました。

全く初めてスペイン語を勉強してみようという人達や、最初から勉強を始めたい方々が参加できるクラスです。

講師は皆様のご存知のEmilio Olmosさんをお願いし、懇切丁寧な授業が期待できます。一念発起してスペイン語を始めたいと思う方はどうぞ、**ロサへ!**

II. スペイン語教室一覧表

本年4月から上記の“ロサ”を加え下表のように合計11クラスになりました。興味のある方は是非一度教室をのぞいて見て下さい。

教室名	講師	開講日	時間
ロサ (会話・ABC入門)	Emilio Olmos	水曜日	13:30～15:00
アマポーラ (会話・初級Ⅰ)	Emilio Olmos	月曜日	10:30～12:00
カメリア (会話・初級Ⅱ)	Emilio Olmos	月曜日	13:00～14:30
アスセナ (会話・中級Ⅰ)	Emilio Olmos	月曜日	14:45～16:15
イビスコ (作文・中級)	Joan Dorado	月曜日	10:30～12:00
マルガリータ (文法・入門)	高柳 治子	水曜日	10:30～12:00
ビオレタ (文法・初級)	橘川 万里子	水曜日	10:30～12:00
ヒラソル (会話・中級Ⅱ)	Joan Dorado	水曜日	10:30～12:00
クラベル (会話・初級・Ⅲ)	Joan Dorado	水曜日	13:30～15:00
セレン (文法会話・中級)	栗山 由美子	土曜日	10:30～12:00
新聞雑誌を読む会 (上級)	栗山 由美子	土曜日	10:15～11:45
＊開講日は原則として第1・第2・第3週の月3回です。 ＊新聞雑誌を読む会 (上級) は毎月第4土曜日・1回のみです。 問い合わせ先：スペイン語担当 牧瀬 貢			

スペイン語教室紹介第8回 「イビスコ」

イビスコはスペイン語作文を主眼にした中級の教室です。講師はスペイン・バルセロナ出身の情熱的でアグレッシブな創造性にあふれた授業を展開するJoan Doradoさんです。基本的な作文法のアクセントから、書取り、日記の書き方を通じて動詞の使い方なども徹底的に指導し、自然にスペイン語が身につきます。

教材は全て講師の手作りでユニークな創作品です。

一般の教科書とは趣が違ふところが多く面白いです。もちろん会話もたくさんあります。

人数は12名に絞っています。まじめにスペイン語を勉強したい人はどうぞご参加ください。¡Ánimo!

お問合せは上記スペイン語担当へどうぞ。

(牧瀬 貢)



▲会話に熱気が伝わります

私のスペイン *スペインは多様の国です。それぞれの人の想いも多様です。あなたの想いは何ですか？

—— 会員投稿 ——

喝采の果て

—— 宮崎 紗伎 ——

闘牛と聞くと血が騒ぐ。居ても立ってもいられない気分になる。

何十年も前、何かの雑誌で目にした「闘牛、野蛮だ。だが、美しい」という一節が忘れられず、実際に闘牛を見たいと思い続け、そのこともスペインへ行くきっかけの一つだった。

マドリードで初めて闘牛を見たのはいつだったか記憶にないが、闘牛の開始はマドリードの春の風物詩だったような気がする。

ノビージョ（若牛）相手の闘牛は、成牛相手の闘牛とは迫力が違うが、それでも男と牛の華やかな駆け引きのドラマは、野蛮といわれようと美しく、何度見ても飽きない。

一度だけ、マタドールが牛の角に跳ね上げられるのを見た。ピンクの華やかな衣裳を纏った細い身体が宙に舞い、アッという間に地面に叩きつけられた。



闘争心を剥きだしにした牛が、闘牛士の身体を角で小突く。猛獣が捕まえた獲物を面白がってなぶる、そんな感じだった。飛び出して来た他の闘牛士達がムレータを繰り、牛の注意を引こうとするが、牛は悠然と、誇らしげにさえ見える態度で、叩きつけられたままの格好でピクリともしないマタドールをなぶり続けている。牛が角を振り上げる度に、騒然としたスタンドから女性の悲鳴が上がる。しかし、手に汗握る場面はそれほど長く続かなかった、と思う。

傷ついた闘牛士は、私の友人のスペインの実業家がひいきにっていて、地方の闘牛場に出ていた頃、大きな花束を持って友人と一緒に見に行ったことがある。白いハンカチが揺れるスタンドに向い、私から受け取った花束を高々と掲げ、名誉の証の、切り取られたばかりの牛の耳を私に投げてくれた。

彼は一命を取り留めたが、闘牛士としては再起することなく、その日以来彼の名前は表舞台から消えた。

血に染まるムレータ春の風荒び 紗伎

—— 連載・会員投稿 ——

DE SHIBUYA A CHAMBERÍ (diferencia entre dos culturas)

—— Emilio Olmos ——

Tengo un nieto. Yo le llamo Emilio-kun. Es la única persona que tiene paciencia de escuchar mis narraciones sobre Japón. Todas las demás, a los dos minutos de empezar me dicen: pero hombre, cállate ya, no nos cuentes más imbecilidades tuyas, eso no se lo traga nadie, ¿crees que somos tontos, o qué?

“Emilio-kun” (así se lo puse yo, porque me gustó esa manera de llamar por aquí a los muchachetes) sí me cree. Los demás están convencidos de que Japón no es como yo se lo describo, sino como ellos siempre han oído y hasta algunos han leído en artículos de revista o en escasísimos libros. Por supuesto, que la mayor parte de su falsa información, la obtienen a través de la tele. Crean que yo me aprovecho de que nunca vendrán a comprobarlo y que por eso doy rienda suelta a mi imaginación, presumiendo de Marco Polo moderno.

El Abuelo.-(Deseando oír una afirmación.) ¿Quieres que te cuente, o no?

Emilio-kun. -Sí, sí abuelo, cuéntame. Pero empezando por el principio, que si no, me armo mucho lío, porque hablas muy embarullado y además lo dices muy deprisa.

El A.-Lo primero, lo primero, que me llamó la atención, fue antes de bajarme del avión. En cuanto se paró, ansiosamente miré por la ventanilla, y...todo era igual que en cualquier otro país. A primera vista, claro. Porque...,

observando atentamente los detalles, encontré que todo era diferente. Los empleados, desde la altura del boing, parecían muñequitos. Esto se debía a que no había ni uno sin uniformar. Pero lo más sorprendente, eran los guantes.

E.K.-¿Qué tienen los guantes de sorprendente? También en España hay guantes.

El A.-Sí, es verdad. Casi todo lo que hay en Japón, también lo hay en España. Lo sorprendente es la manera de utilizarlo, las ocasiones en que lo hacen y las circunstancias. Sobre todo las circunstancias. Esta mañana observé a un frutero. También llevaba el mismo tipo de guantes. Vendía en la calle. Se quitó y se puso los guantes decenas de veces. Para coger la fruta se los ponía. Para cobrar se los quitaba. Cada operación que realizaba en su puesto requería tenerlos o no. Y así estuvo todo ese día. Y así está todos los días del año, quitándose y poniéndose guantes. No creo que haya otra cosa en su vida que realice más veces que eso.

E.K.-Bien, bien, abuelo. ¿Hay alguna otra cosa sorprendente además de los guantes?

E.A.-Todavía no he terminado con el tema, ya que también los llevan los taxistas, los albañiles y... muchos más. Siempre son blancos.

E.K.-¿Como los tuyos de la foto de la Primera Comunión?

E.A.-Sí, más o menos. Se venden por todas partes. Son baratísimos. Y a los pocos usos quedan desechados. Sólo los usan los oriundos de aquí. Al menos, yo nunca he visto a un inmigrante con guantes.

E.K.-Bueno, cambia de rollo. Otra cosa más chocante.

E.A.-Todo absolutamente todo, sigue siendo de lo más chocante para mí. Cada día de estos quince años salgo de casa dispuesto a observar detenidamente lo que me rodea. Cosa que los japoneses no hacen. Nunca los he visto detener su mirada en personas u objetos fuera de espectáculos o exposiciones. Sus ojos siempre están en el objetivo al que se dirigen, o leyendo, o cerrados, sesteando sin acostarse.

Como odio la rutina y me encanta observar rarezas, es una de las razones por la que quiero continuar aquí. Muchas veces te he contado cosas y pienso seguir siempre igual, ya que creo que te gusta. Hoy he empezado por el principio de mi estancia. Otro día quizá empiece por el final.

Hasta la próxima.

渋谷からチャンベリへ（日本とスペイン文化の相違） エミリオ・オルモス

私には、孫が一人います。私は彼をエミリオくんと呼んでいます。彼だけが、私の日本についての話を、辛抱強く聞いてくれます。他の人は皆、私が話し始めるやすぐにこう言います。「もうやめてくれたまえ、君のそのばか話を。誰もそんなこと信じたりしないから。それとも私たちが、ばかだとも思っているの?」

エミリオくんは、(このように名付けたのは私です。少年をこのように呼ぶのは、気に入っていましたから。)私の話すことを信じてくれています。他の人たちは、日本という国は私が話すような所ではなくて、彼らがいつも耳にした、ある人たちは雑誌やわずかな本で読んだような所だと思っています。もちろん彼らはその間違った情報の大部分を、テレビから得ています。彼らは、私の話を確かめに日本に来る人など誰もいないことをいいことに、私が現代版マルコ・ポーロを気取って、好きなように想像をめぐらせていると思っていますのです。

おじいちゃんとエミリオくんの会話

おじいちゃん (聞きたいよ、の言葉を期待しながら)「おじいちゃんの話、聞きたいかい?」

エミリオくん 「うん、お話して。でも、はじめからお話してね。じゃないと、ぼくこんがらがっちゃうよ。だっておじいちゃんは、あれもこれも、そしてものすごく早く話すんだから。」

おじいちゃん 「おじいちゃんの気をひいた最初のはね、飛行機をおりる前だったよ。飛行機がとまって、どきどきしながら窓の外を見たんだ。他の国と何も変わってはいなかったよ、はじめはね。でも気をつけてよく見たら、全部ちがっていたよ。飛行場で働いている人達は、ボーイングの上から見ると人形みたいだったよ。それはね、誰一人として制服を着ていない人はいなかったからね。でも一番驚いたのは、手袋だったよ。」

エミリオくん 「手袋がどうしたの? スペインにも手袋はあるよ。」

おじいちゃん 「うん、そうだね。日本にあるものは、ほとんど全部スペインにもあるね。とくに驚いたのは、手袋の使い方、それを使う時、それを使う理由だよ。今朝、果物屋さんを見ていたら、その人も同じ手袋をしていたよ。彼は、通りで売っているんだ。何十回も手袋をぬいだりはめたりしていた。果物を手にする時にははめて、お金を受け取る時にはぬぐんだよ。動作ごとに手袋をはめるかはめなかがきまるんだ。その日ずっとそうしていたよ。そして毎日そうやって、手袋をぬいだりはめたりしているんだ。彼の一生の間で、それ以上にくりかえされることが、他にあるとは思えないよ。」

エミリオくん 「わかったよ、おじいちゃん。手袋のほかに、驚いたことは?」

おじいちゃん 「手袋の話はまだおわっていないよ。タクシーの運転手、左官屋さんに……、まだいろいろなひとたちがね。そして手袋はいつも白なんだよ。」

エミリオくん 「初聖体の時の写真にうつっている人たちみたいの?」

おじいちゃん 「そうだね。手袋はどこにでも売っているんだよ。とても安いよ。ちょっとしか使わないで、捨ててしまうんだ。それに、日本では日本人しか使わないよ。他の国から来た人が手袋をしているのは、おじいちゃんは見ることがないね。」

エミリオくん 「わかったよ。お話を覚えてちょうだい。もっとびっくりするようなお話をして。」

おじいちゃん 「おじいちゃんにとっては、全部がびっくりすることなんだよ。この十五年の間毎日、おじいちゃんはまわりのことをよく見ようと思って家を出るのだよ。日本人がやらないこと……、それはね、何かの催しものとか展示会の時以外は、日本人は人や物に目をとめないのだよ。目はいつも自分が視線を向けたものにおかれているのだよ。さもなければ、本を読むとか、目を閉じているとか、座ったまま寝ているとかね。おじいちゃんはずきんと決まったことが嫌いで、変わったことが大好きだから、日本に住み続けていた理由の一つもそこにあるのだよ。何度も君にいろいろな話を話したね。これから続けるつもりだよ。君には気に入ると思うよ。今日は日本に着いたところのことをはなしたね。次は後の話を話そうね。じゃ、またね。」

注：チャンベリはマドリードの中心部にある若者たちのたまり場です。東京の渋谷に似た場所で、筆者はそこへ行くのが大好きです。
(訳：高柳治子)

—賛助会員各社の会員サービス内容—

◆会員証の提示で、下記賛助会員企業より、表記のサービスが受けられます。

賛 助 会 員	住 所	電 話 番 号	会 員 サ ー ビ ス 内 容
レストランオーリーブ	横浜市中区高島2-5-10	045-441-4996	サングリア1杯無料
カサ・デ・フジモリ 関内本店	横浜市中区相生町1-25	045-662-9474	サングリア1杯無料
Bar Español	カサ・デ・フジモリ 関内本店前	045-651-1074	サングリア1杯無料
カサ・デ・フジモリ 目黒店	J R 目黒駅（東京）徒歩5分	03-5420-5328	サングリア1杯無料
太陽海外航空(株)	東京都中央区京橋2-2-14 山陽アネックスビル	03-3281-2441	成田空港使用料の負担
メイプル・ノブ	横浜市神奈川区西神奈川1-6-1 サクラビル701	045-321-5638	押し花材料代10%割引
日西商事（うさぎのいる島）	横浜市戸塚区品濃町252-3	070-5024-8196	ワイン1杯無料
カサ・デ・セビージャ	横浜市青葉区青葉台1-32-35	045-981-1282	ワインまたはサングリア1杯無料

//////////////// 新入会員紹介 //////////////////

正木 三榮子 (Mieko Masaki) 2004年3月1日入会

東京都八王子

10年余り前、スペイン歌曲にあこがれてサンティアゴ・デ・コンポステーラの国際音楽講習会に参加しました。あいさつ程度の語学力、おまけに日本人は私一人でとても心細かったのですが、明るく楽しいスペインや中南米の人たちの暖かさに接し、すっかり虜になってしまいました。

勉強不熱心で、スペイン語はなかなか上達しませんが、仲間にいていただき、もっともっと多くのことを知りたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

島田 ユミ子 (Yumiko Shimada) 2004年3月20日入会

東京都練馬区

マドリードの声乐音楽院で学び、帰国後2001年に日本サルスエラ協会を立ち上げました。そんな関係で、私にできることでしたら、スペインの文化や、日本とスペインの交流のために何でも協力させていただきたいと思っています。

特に、サルスエラを日本の文化芸術の中に定着させて行きたいので、「サルスエラを歌う日♪」等という、皆様と一緒に「チョティス」や「パロマの前夜祭」の名曲、定番を歌える集まりがあると楽しいかな！ と思っています。

— 事務局からのお知らせ —

●AIYES通信への投稿のお願い：次号39号（9月1日）の原稿締切は7月17日（土）です。

来年の協会創立15周年を迎えて、会報を更に充実させるためには、多くのみなさまの参加が不可欠です。アンケートでもご希望がありましたので、今号から「私のスペイン」欄を設け、スペインとのかかわり、好きなところ、好きなもの、私のスペイン情報などの記事を、会員のみなさまから広く投稿いただくことにしました。気軽に投稿していただくようお願いします。

字数は特に制限いたしません。短文の場合は複数掲載。長文の場合は分割掲載いたします。何回投稿していただいても結構ですが、年3回発行のため4ヶ月おきになります。原稿は手書き（ワープロを含む）でも、E-mailでもどちらでも結構です。写真はできるだけ付けて下さい。プリントでもメール送付でもお受けします。お問合せと原稿・写真の送付先は編集委員・渡邊昭夫をお願いします。

●会費の納入はお済ですか？

2004年度の会費納入は4月30日までになっておりますが未納の方は、お早めをお願いします。

<編集後記> 春を迎え、新しい企画が誕生します。創立15周年記念行事企画もスタートします。気分も新たに会員の皆様のご協力をお願いいたします。

* 事務局

横浜市青葉区
横浜スペイン交流協会会報係

次号の原稿締切は
7月17日(土)です。
投稿は800字以内、写真1点をお付け下さい。